

金 哲

『韓国の人口と経済』

岩波書店, 1965年7月, 264ページ

危機とよぶにもっともふさわしいほど深刻をきわめた事態にたちいたった韓国の人口・経済問題の実相に鋭い客観的分析のメスを大胆にあてた本書が韓国を祖国とする金氏の手によって世に送りだされたことは、類書がほとんど皆無の現状だけに、学術研究の面で後進国開発問題の研究を一段と前進せしめる貴重な貢献であると同時に、今日たまたま日韓基本条約が仮調印を終え、両国が正常な友好関係に入ろうとしている時だけに、日韓両国民の相互理解を深める上でも寄与するところがはなはだ大きい、と信じるものである。

本書は3編11章からなり、次のような構成になっている。第1編の「人口調査と人口数」では、まず韓国における「人口調査の歴史」(第1章)を概観し、1910年以降の人口統計を批判的に検討した後、発見された人口統計の重大な欠陥を修正すべく著者自身で新たに「解放前の人口数」(第2章)および「解放後の人口数」(第3章)の推計を試みる。ここで示した著者の着眼はまったく卓抜であって、教えられるところが多い。次の第2編の「人口の分析」では、前編での検討に基き不完全な統計を巧みに駆使して、「人口増加率」(第4章)、「出生」(第5章)、「死亡と将来人口」(第6章)、「人口構造」(第7章)など広く人口増加の実態分析が展開される。とくに出生の社会的構造の分析は美事である。第3章の「人口と経済」では、韓国経済の植民地時代(第8章)および解放後(第9章)の半世紀を通じての停滞が克明に敘述され、著者によって「断絶」とよばれる人口規模と経済規模との極端な不均衡が結論される。その帰結は大量の失業と深刻な貧困の集積である(第10章)。最後に、著者は第1次経済開発5ヵ年計画を詳細に検討批判して、近い将来においてこの「断絶」が多少とも緩和されるであろうとする明るい見透しはまったく認められないと断定している。その意味において、本書はいわばマルサス流の悲痛な暗黒の書というべきものである。しかし、著者はこうした現実決して絶望することなく、失業問題に対する当面の対策として「雇用組織」を提案する。重き病の床にあって本書を完成した著者のなみなみならぬ精神力と

燃えるが如き祖国愛をここにも認めることができよう。

以下、私にとくに興味深く感ぜられたところを自由に要約して、紹介しよう。その第1は著者の試みた植民地時代の韓国人人口の推計である。いま人口を P 、自然増加率を r 、海外への流出超過を M とすれば、 $P_{-1}(1+r) - M = P_0$ である。ここで r と M が判っておれば、推計基礎人口 P_0 をもとにして、その前年の人口 P_{-1} を上式によって算出できる。これが著者の推計方式の基本である。まず、日本・満州などに残された資料を加工して年々の M の値を推計する。1910—45年の期間に M の値は最小1万から最大40万まで分散していて、その累計は約330万に達する。次は r の推計である。1925年以降は5回の国勢調査から r の平均値を算出し、これを国勢調査年次間の各年に一律適用し、さきに推計された M と合せて上式によって各年の人口を推計する。しかし、1925年以前には信頼のおける人口統計がないので、この時期の r は不完全な人口動態統計による出生死亡の差増率によって1925—30年の r を延長推計する。えられた結果を既存の現住戸口統計と対比してみると、総督府行政の滲透過程に当る1910年代における両者の差は著しく大きい。

現住戸口統計			金推計			現住戸口統計			金推計		
(A)			(B)			(A)			(B)		
			B/A						B/A		
1910年	1313	万	1.24	1914年	1562	1687	1.08	1915年	1596	1703	1.07
1911年	1383	万	1.19	1920年	1692	1763	1.04	1925年	1854	1902	1.03
1912年	1457	万	1.14								
1913年	1517	万	1.10								

この労多い推計作業の結果から、次のような興味ある事実が明らかとなった。1910—45年の期間に生じた人口の自然増加は1270万に達したのであるが、その26%は海外に流出し、国内での人口増加は945万にとどまった。とくに戦時の1936—45年には自然増加の36%に当る人口が海外に移住した。そのため、1945年には海外居住の韓国人は日本の210万、満州の160万など合計400万をかぞえた。これは国内居住の韓国人人口の16%に当るが、移民で知られたインド人や中国人のこれに対応する比率がわずかの1—2%と推定されているのと較べて、まことに驚くべき移民規模といわねばならない。移民に関して著者は米消費量の減少、小作農の増加など専ら移動のプッシュ要因の側だけを強調しておられるが、同時にプル要因も考慮しての多元回帰の手法による分析の拡充が是非とも望まれるところである。

この人口の流れも1945年8月以降まったく停止し、

解放直後の時期には逆に海外からの引揚者が200万をこえたと推定される。さらに韓国動乱期には人口消失100万、北韓よりの南下人口40万という人口の社会的大変動が生じた。差引き140万余の人口増加である。

次は人口の自然増加である。推計作業によって判明したところによれば、人口の自然増加率は1910—15年の1.0%から1931—35年には2.1%へ、さらに1956—60年には2.9%へと、増加一方の趨勢にある。これはまったく死亡率の低下によるものであった。出生率はこの半世紀の間生物学的上限ともいいうる4.2—4.5%の間を上下したものとみて大過ない。この間におきた経済的・社会的変動も多産の社会的構造には何等の影響ももちえなかったのである。それだけに、現在韓国政府によって推進されつつある出生調節政策も、経済建設や社会改革の総合政策が並行しないかぎりにおいて、その真の効果はほとんど期待できない性質のものといわざるをえない。これに対して、死亡率は1910年代の3%台から1930年代には2%へ、さらに最近では1.5%へと趨勢的に低下した。解放前の死亡率低下は植民地統治のために日本が韓国に持込んだ外部生活とでもいふべきものの効果によるものであった。同じく日本の植民地であった台湾の死亡率が韓国のそれに若干先行しつつもほぼ並行して低下していた事実からも、この点は確認できる。解放後の死亡率の低下はまったく新薬の効果によるものだが、台湾の死亡率が最近0.8%と戦前の半分以下に低下したのにくらべて、韓国での死亡率の改善は著しくたちおけている。それは、韓国における生活状態の悪化が新薬の効果をも大きく減殺するような死亡の増大傾向をもたしているからに他ならない。

かくして明らかとなった韓国における人口規模の増大テンポは以下のようなものである。

	1910~45年	1945~60年
自然増加率	1.66%	2.52%
全増加率	1.32	2.89

これに対応する経済規模の拡大テンポは果してどのようなものであったらうか。これが次の分析課題である。

まず、就業者の産業別構成を1930年と1960年の間で比較してみると、第1次産業は80%から76%へ、第2次産業は6%から7%へ、第3次産業は14%から17%へとわずかに変化したにすぎず、産業構造はこの30年間ほとんど不動のまま依然として低開発の農業国段階に停滞していたことが判る。多産の社会的構造が微動だにしなければならぬ理由も了解できるであろう。また、台湾の1920

年における就業者の産業別構成が順に71%、10%、19%であったのとくらべても、産業構造における韓国のたちおくれは否定しがたいところである。

次に、産業別生産の年当り増加率を解放前と解放後とで比較してみると、以下のようなものである。

	1915~40年	1953~62年
	%	%
農林水産業	2.25	2.35
鉱業	8.87	16.86
工業	10.63	12.16
3産業の計	4.53	4.85

解放前は生産額、解放後は付加価値額の統計だから、比較は決して厳密なものではないが、予期される生産統計の不備を考慮すれば、財貨生産部門の生産増加率には解放前と解放後とで差はなかったといつてよいだろう。これに対して、人口増加率はすでにみたように解放前にくらべて解放後は優に倍増しているのだから、解放前には大量の移民送出を条件としてからくも保たれていた人口規模と経済規模とのバランスは、解放後に至って急速に崩壊しつつあるとみななければならない。とくに、解放後に人口増加率が農林水産業の生産増加率を上廻っている事実は、ことが食料に関するだけにきわめて重大である。1960—62年の1人当り穀物消費量は1.2石と推定されるが、これは穀物消費量がすでに低下していた1937—39年の1.6石にくらべて25%も減少している。人口規模と経済規模との「断絶」という著者の結論は決してたんなる誇張表現ではないのである。

こうした現状分析をふまえて、著者は「韓国における人口増加の趨勢は、死亡の増加によって漸次に鈍化するであろう」というきわめて悲観的な展望を結論するのであるが、その予測の当否はともかくとして、少なくとも韓国の現状がそうした方向を潜在しているということだけは、われわれとしてもこの際十分に認識しておく必要があるであろう。

もとより本書といえども、分析上あるいは記述上の問題がないわけではない。失業の分析はわが国の研究水準からみて必ずしも十分とはいえないが、説明不十分のため計数相互の関連が明らかでない箇所もある。しかし、それらの取柄は本書の価値を少しも損ずるものではない。烈々たる祖国愛を冷徹な客観的分析に托した本書は人をしてものを思わしめるものがある。著者の健康快復の一日も早からんことを祈って、この小評をとぢたい。

【梅村又次】